

Sasakawa Yohji
笹川陽平

病氣と差別への戦い

世界の ハンセン病が なくなる日



明石書店

〈著者略歴〉

笹川陽平（ささかわ ようへい）

昭和14年東京生まれ。明治大学政経学部卒。現在、全国モーターボート競走会連合会名誉会長、日本財団理事長、世界69大学を結ぶ奨学金ネットワーク、中国の医師2000名のための研修制度の設置、アフリカの食糧増産運動やチェルノブイリ原発事故の被災児20万人の検診などを手がける。世界的視野に立ったNGO活動の立案・実行の第一人者。ロシア友好勲章、ミレニアム・ガンジー賞、チェコ・ハベル大統領記念栄誉賞、読売国際協力賞など受賞多数。

世界のハンセン病がなくなる日 ——病氣と差別への戦い

2004年11月30日 初版第1刷発行

2005年2月25日 初版第3刷発行

著者	笹川陽平
発行者	石井昭男
発行所	株式会社 明石書店

〒101-0021 東京都千代田区外神田 6-9-5

電話 03 (5818) 1171

FAX 03 (5818) 1174

振替 00100-7-24505

<http://www.akashi.co.jp>

組版	明石書店デザイン室
印刷	モリモト印刷株式会社
製本	株式会社宮田製本所

笹川陽平

世界の
インセン病が
なくなる日
死と差別への戦い



明石書店

はじめに

私の一文が二〇〇三年八月二七日付け読売新聞『論点』に「人権から見たハンセン病」と題して掲載されました。これを読まれた明石書店の石井昭男社長から「世界のハンセン病の現状」を書いてはとのお誘いを受けたのがことの始まりです。過去、気軽に新聞連載を引き受け七転八倒の思いをした経験があります。一冊の書籍を書き上げることの厳しさは十二分に承知しています。安請け合いは禁物と考えました。また、ハンセン病制圧の活動で海外出張も多く時間的余裕ありませんでした。

しかし、明石書店からの「それでは口述し、まとめることでは」との再度のお誘いがあり、そのご厚意に甘えることにしました。本書は、三冬社の野中文江さんによる精力的なまでの資料の読み込み、そして的を射た質問によって生まれたものです。

世の中には日ごろ話題になることなく表面化もしない多くの問題が存在します。本書を通じてそうした事実の一端を読者に知っていただければ私にとってこのうえない喜びです。

上梓直前の二〇〇四年一〇月、私はWHO（世界保健機関）ハンセン病制圧特別大使として読売国際協力賞を受けました。受賞を機にさらにハンセン病制圧と患者、回復者の人権問題に取り組もうと決意を新たにしております。

二〇〇四年一〇月

インド・ゴアにて

笹川陽平

目次

はじめに 3

I これまでとこれから 13

1章 父・笹川良一の志

1 ハンセン病制圧は笹川良一の夢だった 15

私とハンセン病との出会い／父のライフワーク
すでに一九六七年にはインドにハンセン病救済の施設を／石館守三博士との出会い
若いころからハンセン病根絶を目指した石館博士／新薬「プロミン」の合成
劇的だった新薬の効果／当時の医学界

2 ハンセン病のための笹川記念保健協力財団を設立する 27

志のある数人の人が出会って、世界的な事業が始まった
父は日野原先生たちの計画に興味を持った／笹川記念保健協力財団の誕生
「もう一つ財団をつくってはどうか」と父はいった

「それはいい、すぐやろう」と世界的な事業が始まった

明治生まれの七五歳と七三歳の老人が始めた大事業

石館先生の方針／人材が統々と結集した

ネパール人と間違えられた湯浅洋先生

3 W H O（世界保健機関）との連携は父の遺した最大の遺産—— 41

W H Oとのつながり／W H Oとのつきあいは父の遺した最大の遺産

「みなさんのお金は、世界のために役立っています」

天然痘根絶への協力が評価されて／W H O本部で笹川良一自ら人体実験

ジェンナーの家を保存する／タイに研究施設を

人所者といっしょに食事をした父／父の涙

ヨハネ・パウロ二世に謁見／父の遺志を継ぐ

2 章 ハンセン病の苛酷な歴史

1 差別の歴史—— 57

私は「人が人を差別する歴史はハンセン病から始まった」と思っている

世界で共通する苛酷な歴史

ハンセン病はなぜ偏見や差別の対象となったのか

差別の歴史／隔離収容の法制化

患者全員を強制隔離の時代に／「治る病気」になってからも
らい予防法を廃絶しようとしなかった政府、専門家
退所者もいたが……／らい予防法の廃止、熊本地裁での勝訴
差別は過去のものではない—— 70

熊本での宿泊拒否事件／隔離の現実

回復者の村／社会から隔離された場所で

患者さんと目線を合わせ、手を握り合う／帰れば家族に迷惑がかかる

3章 ハンセン病制圧に向けて

——WHOのハンセン病制圧特別大使として

1 制圧のための特別大使に任命される—— 77

“夢”でしかなかったハンセン病の制圧／笹川記念保健協力財団の参入

画期的な治療薬・MDTの登場／湯浅洋先生の証言・プロミンからMDTへ

日本財団、MDTの五年間無料配布に踏み切る

薬を入れる透明包装（プリスターパック）の開発が制圧に貢献

世界の患者数が激減した／制圧の数値目標設定の意味

グローバルアライアンス（ハンセン病制圧世界同盟）を結成

ハンセン病制圧特別大使に任命されて

薬は世界の隅々まで、無料で届いている／“外圧”はこの国でも必要
WHOは人が代わるが、われわれの財団は代わらない
顔の見える援助／国際関係は人と人のつながりである
日本の一五施設を訪問／回復者の一人から多額の寄託金が
毎日寄付への礼状を書く／ガンジー賞を受賞

2 未制圧国の現状と最近制圧に成功した国

103

未制圧国は残り数カ国／制圧の鍵を握る国・インド
新政権のもとで、制圧に動きはじめたブラジル

厳しい地理的条件、政情不安など問題の多いネパール

貧困と疾病の根絶を目指すマダガスカル／北部地域に患者が多いモザンビーク
内戦終結でようやくハンセン病制圧に乗り出したアンゴラ

最近制圧に成功したミャンマー／ブータンが制圧に成功した理由

3 制圧から根絶への問題点を考える

117

ハンセン病の制圧に重要なこと／ハンセン病はだれでもかかる病気である
縦から横へ／医学と宗教だけでは制圧はできない
救済から制圧へ／患者からの声が、なかなかあがらない病氣
患者を早期に見つけ出すために／私の活動はくり返しが重要

ここにも父の影響が……／ハンセン病一つにしまった財団運営
私の生きがい

4章 人間の尊厳を求めて

1 これからは回復者が主役——131

ハンセン病の人権問題を訴える主役はハンセン病の回復者である
これまでハンセン病の専門家が気づかなかったこと

2 回復者のネットワーク・「アイデア」発足——133

回復者自身の参加こそ／アイデアの発足

回復者を専門家と対等な立場に／回復者自身のとまどい

ハンセン病の患者は世間の目を恐れて生きてきた

各国に広がる「アイデア」の理念／ハンセン病の歴史の中で画期的な出来事
当事者を力づける発想

3 ハンセン病の人権問題を世界に訴える——145

ハンセン病の人権問題を初めて国際会議で訴える／国連人権委員会に働きかける
国連の役割／「差別をなくすことは社会の責任である」という認識の大切さ
ついに国連が動き出した

5章 解決への道

ハンセン病が当面する二大問題をどう解決するか

社会が持っている病気を治す／「統合」を目指して

社会全体を巻き込む「波」を起こさなければならぬ

大局観があった創始者たちの志を体して

アマゾンで出会ったハンセン病に寛容な家族

Ⅱ 訴え続けて

163

1 国際会議での訴え

(1) 第五回フォーラム2000会議

——ハンセン病に見る人権問題（二〇〇一年一〇月一五日）

165

(2) 第六〇回国連人権委員会（二〇〇四年三月）

170

2 メディアでの訴え

(1) ハンセン病 次は差別解消だ（『読売新聞』二〇〇一年五月三一日）

173

(2) 「父の夢」実現を法王に……（『産経新聞』二〇〇二年一月二五日）

176

ハンセン病制圧特別大使 ニューズレターでの呼びかけ

- (1) ニューズレター発刊に寄せて 189
- (2) 縦割りから横断型へ 193
- (3) ハンセン病と人権 195
- (4) “届かないところ”に“届ける”ために 196
- (5) アフリカ諸国政治リーダーの決意 198
- (6) 危機感はあるのか? 199
- (7) コミュニケーションの必要性 201
- (8) 差別撤廃への私の決意 203
- (9) 社会的インテグレーション（統合）へ向けて 204
- (6) ハンセン病はもう烙印ではない
（「インタナショナル・ヘラルド・トリビューン」二〇〇四年九月一八日） 186
- (5) 差別撤廃、国連決議が必要（「読売新聞」二〇〇四年五月一三日） 183
- (4) 隣り合わせの静寂と喧騒（「産経新聞」二〇〇四年一月二六日） 180
- (3) 人権から見たハンセン病（「読売新聞」二〇〇三年八月二七日） 178

(10)統計数字は信頼できるか？ 206

4 各国訪問の中で

- (1) アンゴラ (『愛生』二〇〇四年一月号) 209
(2) マダガスカル (『愛生』二〇〇四年三月号) 216
(3) インド (『始良野』二〇〇四年陽春号) 219
(4) マルタ共和国 (『新生』二〇〇四年六月・第二号) 224
(5) インド (『高原』『青松』二〇〇四年六月号) 230
(6) ネパール (『楓』二〇〇四年七・八月号) 234
(7) ブータン王国 (『ナイスバル』二〇〇四年七月号) 241
(8) チリ・ブラジル (『駿河』二〇〇四年秋号) 243

おわりに 249

参考文献・初出誌発行元 253

I

これまでとこれから

1章 父・笹川良一の志

1 ハンセン病制圧は笹川良一の夢だった

——私とハンセン病との出会い

私が、ハンセン病と関わりを持ったのは、父・笹川良一の海外出張のお供で韓国を訪れた一九六五（昭和四〇）年のことでした。いまから四〇年ほど前のことです。当時から父は海外に出かけますと、その国の無名戦士の墓への参拝と現地のハンセン病の病院を見舞うことを、常としておりました。

さて、この韓国行は私にとって、初めての海外出張のお供だったわけですが、ソウルのホテルに着くと、父は私に、「おまえ、金をいくら持っているか」と尋ねました。私にしてみれば初めての海外出張ですし、家族、友人にお土産を買いたいとも思っていましたから、多少のお金は持っていました。持っている金額を正直に父に申告しますと、父はこういったのです。